

## 論文の和文要旨

論文題目

イジー・コラーシュの詩学

氏名

阿部 賢一

本稿が目的とするのは、イジー・コラーシュの「ポエジー」とはなにか、すなわち、イジー・コラーシュの「詩学」の探求である。コラーシュが用いる「ポエジー」という概念は、言語芸術の詩のみならず、造形芸術のコラージュをも内包している。コラーシュは、詩論あるいはコラージュ論をみずから著書のなかで展開しており、それらを読み解きながら、また彼の作品に触れることによって、コラーシュの標榜する「ポエジー」を検討する。

1914年に現チェコ共和国のプロチヴィーンで生まれ、2002年にプラハで没したコラーシュは、20世紀後半のチェコ芸術において、またヨーロッパのアート・シーンにおいて、類を見ない「コラージュ作家」として一般的に認識されている。だが、表現媒体としての言語と決別し、コラージュ創作に至る以前のコラーシュの詩作品については、「ヴァリエーション」、そして「ヴィジュアル・ポエトリー」といった手法により、20世紀における詩の一つの到達点を示しているにもかかわらず、「詩人」としてのコラーシュの評価は、チェコ以外ではほとんどなされていない。また本国チェコにおいても、長年にわたり一般読者が手にすることができなかったコラーシュの詩作品については、幾つかの考察を除き、体系的な研究がようやく始まったのが現状である。

本稿は、以下の三つの観点から構成される。まず、その第一は、これまで断片的にしか知られていないイジー・コラーシュの人物が、チェコ文学および造形芸術に記した軌跡を辿るという史的なパースペクティブ。つづいて、「コラージュ」という概念がイジー・コラーシュの言語芸術、とりわけ詩においてどのように特徴づけられているかを検討する文芸学的な見地。最後に、20世紀の芸術、とりわけ「詩」における「コラージュ」という概念の位置を、イジー・コラーシュの例を通じて、検討する比較アプローチである。

史的なパースペクティブのもと、第I部「軌跡」では、イジー・コラーシュという芸術家の社会的・文化的「軌跡」をたどり、これまでの研究を踏まえて、コラーシュの作品の受容を時間軸に沿って検証することにする。当時の資料、発表された詩集に対する同時代の批評、未発表の書簡等を参考しながら、コラーシュの置かれた社会・文化的状況、芸術的發展、コラーシュの芸術が提起した問題点を照射する。

享樂的なポエティスム、人間の内面への模索を志向したシュルレアリスムという二つの運動体が終った地点から、イジー・コラーシュは出発している。その視点は、まさしく兩大戦間期の芸術運動の批判であり、「モダンの終焉」という考えに基づくものであった。彼は、グループ42の芸術家とともに、「わたしたちが生きる世界」、具体的には都市の辺境に暮らす人々の生活そして彼らの運命を芸術の対象とする。1948年2月クーデター以降、公式の場での活動が禁じられると、詩人は日記という内的独白の場に創作の可能性を捜し求めている。また、1950年代は、政治的に最も厳しい時期であったにもかかわらず、コラーシュの創作活動は衰えるどころか、1940年代に劣らない豊穡なものとなっている。文化環境の閉塞状況は、精神的な閉塞とは同義ではなく、逆に外からの干渉がなかった分、コラーシュはみずからの詩学を研鑽することができたように思われる。いずれにしろ、1950年代はコラーシュが将来歩む「詩学」を決定づける役割を担っている。他者のテキストを再解釈したこの時期を境に、詩人は旧来的な意味での詩という言語芸術との別離を計るからである。1950年代末、コラーシュは「ヴィジュアル・ポエトリー」の執筆に取り掛かり、それ以後は、造形的なコラージュを活動の中心に置いている。そのため、1960年代以降に執筆された詩集『取扱説明書』、芸術論『回答』、コラージュ論『手法の辞典』は、コラーシュ美学の総決算である。『取扱説明書』は詩について、『回答』は芸術全般について、『手法の辞典』はコラージュを通して芸術および生そのものについて、それぞれ論じた書である。造形的な「コラージュ」の深化が芸術活動の中心であった1960年代以降、コラーシュは完全に「言語」と決別することはできず、このような書物を記すことによって、「言語」との何らかの関与を続けることになる。それは、「言語」を用いた「言語」についての思索であり、コラーシュがわたしたちに提示する彼なりの「回答」であるように思われる。

第Ⅱ部「アルス・ポエティカ」は、コラーシュの詩作品を検討する。グループ42の美学でもある「都市のフォークロア」、証言や日記という形態に表出される「テキスト内とテキスト外の時間」、ヴァリエーションおよびパラフレーズに着眼する「他者のテキストと移行の原理」、ヴィジュアル・ポエトリーに特徴付けられる「視覚の形而上学」、最後に、テキストにおける『『詩人』と『わたし』の距離』といった5つの観点から、コラーシュの詩を考察する。

詩作において、変貌を試みつつけるコラーシュの作品は、「詩の内容は、詩の形式である」というハルペツキーの言葉に呼応するかのよう、詩形態の模索の成果でもある。「日記」、「ヴァリエーション」といった手法を経て、「ヴィジュアル・ポエトリー」、さらには「明白なる詩」に至るその手法は、「コラージュ」という他者の言述の取りこみに集約される。

「認識の拡張」を提唱する詩人は、あらゆる手法や素材を用いて、わたしたちに新しい認識をうながしている。それが「ヴァリエーション」であり、「パラフレーズ」であった。そして、キュビストたちが「現実性」をもとめて、オブジェをカンヴァスに取り込んだように、コラーシュは「真正性」を追求して、他者の「証言」を自身の言葉に織り込んだのである。また、旧来的な意味での「詩」という形態が多様化している現在にあって、キュビ

スムが造形芸術において重要な分岐点を示したように、「ヴィジュアル・ポエトリー」の出現は「アナグラム」と同様に「詩学」という概念を根幹から問い直す契機となっている。キュビズムの絵画、とりわけコラージュが提起したのは、ミメーシスの拒絶であったが、「ヴィジュアル・ポエトリー」もまた、ミメーシスという原則に疑問を提起し、言語記号の線状性を否定している。このような状況下、「ヴィジュアル・ポエトリー」という現代詩の一極を担ったイジー・コラーシュの作品を考察することは、個人の作品論ということだけでなく、「詩学」という術語が有する根源的な問い、すなわち「詩」とはなにかという命題を考察することでもあるように思われる。

「コラージュ論」と題された第Ⅲ部では、イジー・コラーシュが探求した「コラージュ」という概念を、20世紀芸術という現象のなかで捉えることを試みる。まず「コラージュ」という概念の変遷を20世紀初頭の芸術運動において検討し、現代詩における「コラージュ」の関係を論じた後、イジー・コラーシュにおける「コラージュ」の意義を総括する。

「パピエ・コレ」、「コラージュ」、「アッサンブラージュ」、「フォトモンタージュ」、「映画のモンタージュ」といった概念は、それぞれの素材および構成方法という点で違いがあるにしても、「断片的な諸要素の結合」という「コラージュ」の基本原理に集約することが可能であろう。美術史における「コラージュ」の系譜を辿るのであれば、1940年代以降に展開されるさまざまな「コラージュ」は、より一層細分化され、技術上の分類が行なわれるにすぎず、コラージュに関する基本的な原理は、1910-1930年代にかけて出揃ったと見てよいだろう。

言語芸術との関連においては、フランスの文学者ミシェル・デコーダンは、文学的「コラージュ」を「一つ、あるいは複数の外的要素のテキストへの局所的な挿入」とし、一方で、文学的「モンタージュ」を「自律的な構造を成すコラージュの総体」と定義している。つまり、「コラージュ」はさまざまな要素が錯綜する動的なモメントであり、それに対し「モンタージュ」は諸要素の錯綜が意図的に構造化され、すでに完成された作品である。詩のモンタージュを試みた詩人としては、アポリネール、ブルトン、英語圏ではT.S.エリオットらがいる。また、チェコ詩では、ネズヴァル、フラバルなどの作品を挙げることができる。

フォトモンタージュが政治的手段であったように、「コラージュ」という手法は、挿入を行なう当事者の意識がもっとも強く反映される。恣意的に素材を選出するのであれば、断片の集合体は理解不能な対象物となってしまう。ある一定の「効果」を創出するには、作者の構成力が問われることになる。イジー・コラーシュの「コラージュ」への最大の貢献は、「言葉」と「言葉」、あるいは「画像」と「画像」といった同質素材のコラージュのみならず、「言語芸術」と「造形芸術」のコラージュといった旧来の領域を超越した作品を展開した点にあるように思われる。それゆえ、コラーシュの『静かなる詩』は、コラーシュの創作活動におけるターニング・ポイントである。マラルメが『骰子一擲』で言語の図像性を強調したのに続いて、コラーシュは、言語記号の視覚的シニフィアンが有する詩的効果を体系的に取り扱った。そして、言語の線状性を根底から揺るがす「読み」の可能性を

提示したのである。つまり、頁に展開される空白との対話であり、絵画に匹敵する文字媒体の使用という点においてである。

コラーシュの「ポエジー」は、同詩集の「明白なる詩」で新たな次元へと解き放たれることとなる。イジー・コラーシュが自身の「ポエジー」に用いるのは、言語だけではなく、ありとあらゆる対象物となるためである。つまり、「ポエジーは、詩だけではない」という発想の逆転により、イジー・コラーシュは、新たな認識可能性をわたしたちに提示したのである。